



四年ぶりの開催 西日本交流会

西日本交流会 in 京都 (参加者: 会員 17 人、学生 3 人)

快晴に恵まれた5月27日、会員と留学生、20人が関東、関西の各地から参加した。コロナによる3年間のブランクの後、ながらく待たれていた対面での交流会の開催である。観光客で混雑する京都駅での集合だったが、定刻に皆さんが揃い、いざ最初の訪問先、地下鉄で烏丸御池の「京都国際マンガミュージアム」へと向かった。

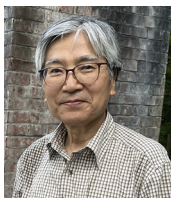
ここは、日本のマンガ草創期から現在に至るマンガ蔵書30万冊を誇っている。会員は子供の頃の懐かしいマンガを見つかり、お気に入りのマンガの最新号を読んだり、また、留学生といっしょに昔懐かしい「紙芝居」の実演を楽しんだ会員もあった。これで、今後はIメイト学生とのマンガの話題にも付いていけるかな。中には、一日中ここでマンガを読んでいたという学生や、もう一度ゆっくりと再訪しマンガを読みたい会員もいた。

再び地下鉄で岡崎の京都市国際交流会館へ移動し、4つのグループに分かれての昼食となった。旧知の方々も、この会で初めて会



た方々も、元々の友人のように打ち解けて、おしゃべりに時を忘れた。熱心な話し声で、人の声が聞こえづらくなるほどであった。

おしゃべりの後は、会員の樋口京一さんのガイドで最高気温28.7度の日差しの中、「琵琶湖疎水記念館」を訪問した。当時の日本最大の疎水工事と発電事業という明治期の京都活性化の一大プロジェクトが、大学卒業したばかりの若き技師により実施されたことを学んだ。先人の努力の姿は、学生の皆さんの目にどのように映ったのだろうか。



最後に南禅寺に到着し、琵琶湖疎水の流れるレンガ造りの水路閣の下で本隊は小休憩をとったが、まだまだ元気のある方々は三門の急階段を登り、眼下に京都の景色を満喫した。桜の名所としても知られるインクラインの線路の頂上で、今度は花を見に来られることを願いつつ全員無事帰途に就いた。

(理事 武田 高)

でも勉強になった

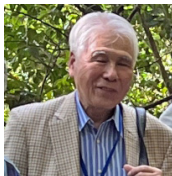
訪問地としてマンガミュージアムと琵琶湖疎水の組み合わせは、なかなか味がかった。ことにマンガミュージアムは、筆者も含め日本人Iメイトはこういう機会でもないとなぜ行かない所。

昼食で臨席したタイのBさんは「ツルネ」という高校弓道部を描いたアニメが好きで、またアニメ「呪術廻戦」の主題歌を歌う男性歌手Eveの大ファンとのこと。と言われても何のことやらチンプンカンプン。

筆者が3回観たアニメは、原爆が投下された広島に近い軍港呉を舞台にした「この世界の片隅に」。Bさんが「それは知らない」と言うので、是非観るように勧めた。

やはりタイからの留学生、Eさんは大学で大阪弁を勉強しているそうで、大阪弁で会話を交わした。「でも、大阪弁はちょっと汚いイメージ」というので、「いやいや、本来の大阪弁は“はんなり”したええもんやで」と反論。彼女には船場の4姉妹が登場する谷崎潤一郎の『細雪』を読むことを勧めた。

(正会員 小田 晋作)



京都での楽しい一日

5月27日(土曜日)、西日本交流会が京都でありました。新型コロナ感染が拮がり始めてからアジアの新しい風に入会した私は今回がリアルプログラムへの初参加でした。

集合場所の京都駅で、アジア風の皆様にお目にかかった時には、オンラインで顔を拝見していましたので、図々しくも初対面の戸惑いはありませんでした。奈良県に住んでいる私にとって、京都は近いはずですが、今回訪ねた京都国際マンガミュージアムも琵琶湖疎水記念館も初めてで、3名の留学生の方々と同じ新鮮な視線で、一緒に楽しく見学いたしました。

マンガに関しては、若い留学生の方達は詳しく興味も相当あるようで、時間が許せば一日中遊んでいたかったかも知れませんね。

昼食は、京都市国際交流会館で4組に分かれて自己紹介を兼ねての談笑。私たちのグループは杜怡萱(ドウイ シュエン)さんを囲んでの語らいが、途中から逆に中国事情を教えてもらうことに。

食後、お隣の琵琶湖疎水記念館で、日本の営業水力発電のパイオニア蹴上水力発電所の歴史展示の説明を伺い、南禅寺に向かって散策開始、水路閣・水路橋を見学し、薫風と青葉を満喫しました。

(正会員 吉岡 京子)



充実した一日

西日本交流会は実に面白かった。京都国際マンガミュージアムは、発見の多い体験だった。漫画は世界の若者の間で大人気で、漫画を通じて、日本の伝統文化やポップカルチャーが他の国に伝わっている、色々な国の若者の興味を引いていることは知っていたが、漫画がこれほど長い歴史を持っていると初めて知り、驚いた。そして、産業として、この数十年間ずっと日本の経済に大きな役割を果たしているという新しい視点で、漫画を見つめ直し始めた。昼ご飯の時は、アジア風の会員の皆さんと、中国文化と日本文化の共通点と違いについて話して、いい勉強になった。

午後、琵琶湖疎水記念館に行って、京都の歴史をもっと深く知るとともに、京都の未来のためにいろいろな困難を乗り越え、琵琶湖疎水を実現した人々の偉業にも感動した。最後に訪れた南禅寺の景色は美しく、心に残った。

タイ人とベトナム人の友達にも出会った。日本語という共通の言葉で、自分の国の文化や生活を話したり、将来について話したのは初めてだ。さらに今まで知らなかった東南アジアのことをいろいろ聞いて、本当に面白い経験だった。皆様のご親切に心から感謝する。(清華大学2年 杜怡萱 Iメイトは岡村一さん)



アジアの新しい風 20 周年、アジ風新聞 80 号を記念して

アジ風 20 年の歩み

2003 年。20 年前の私にとって、最も関心のあることは、「文化の違いをどう乗り越えるか」ということでした。それは国と国のこともあり、ジェンダーギャップでもあり、対立する両者、ことごと、をどう乗り越えるか、折り合えるか、ということでした。そのころは「異文化理解」という言葉が一般的でしたが、いち早く「多文化共生」という言葉をアジ風の理念として今日に至っています。

それまでは、私も戦後世代にありがちな欧米一辺倒の付き合いが多かったのですが、会社を辞め、セカンドキャリアとして日本語教師になったことがきっかけで、アジアの日本語学習者との付き合いが始まりました。そして自分がいかにアジアのことを知らなかったか、に気づき、瞳目の体験を重ねるうちに、深い反省に至り、こういう体験を大勢の日本人にもしてほしい、と願って、「アジアの新しい風」を立ち上げたのです。

それから最初の数年間は、寝食を忘れて、という大袈裟ですが、理事 3 人、監事 1 人で組織作りと活動の実践に明け暮れました。総会、新春交流会、清華大学を初め交流校の開拓、教師の派遣、大学訪問旅行、交流校の学生との I メイト交流、留学生との交流会や観光、新聞の発行、など創立年から始めた諸活動の殆どが次第に改善を加えながらも、

今も累々と引き継がれています。

活動の中核は、I メイト交流ですが、20 年間にはさまざまな変化がありました。E メールそのものが珍しかった時代から SNS の各種通信手段への変化。日本の経済力と他国とのギャップが年々縮まってきたことに起因する変化。誤解を恐れずに言えば、初期の頃ほど I メイト間のきずなは深く強いものがありましたが、近年人間関係が浅薄になってきた感じがします。

2011 年に東日本大震災発生直後には、交流校の学生からの無事確認のメールが飛び交いました。その後 5 年間を通して被災地訪問旅行や植林ボランティアをしましたが、この活動によって留学生の日本理解を深めることができました。また事務局としての最高の喜びは、日本人会員からアジアの若者と交流することで「多様な視点で物事を見ることができるようになった」というコメントをもらうことです。

コロナ禍で 3 年余りがオンライン中心の活動になりましたが、何とか会員数と活動規模が維持できたのは、役員を始め会員の皆さんの熱心な活動のお陰です。そして、ようやく再起動の 때가戻ってきました。

7 月 9 日の創立 20 周年記念イベントでは、「平和を希求するアジ風」を、招聘 I メイト 3 学生のプレゼンテーションや、パネルディスカッションで繰り広げます。アジ風の「草の根の相互理解」は、たとえ微力でも、めげずに地道に続けていきたいと思っています。

(副理事長 上 高子)



＜2007 年に貿易大学へ交流申し込み。左端が筆者＞

NPO 法人アジアの新しい風 創立 20 周年記念イベント

【日時】2023 年 7 月 9 日 (日) 午前 10 時～午後 2 時 ※日本時間
【場所】J&A 地球ひろば (6 階) 市川市立図書館 国際会議場
※200M 以上の駐車スペースあり

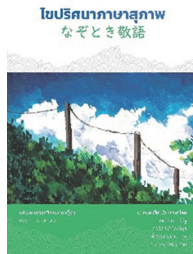
【参加費】無料
【定員】100 名
【申込】2023 年 6 月 23 日 (金) 午後 5 時迄
【申込先】事務局 (〒144-0292 東京都品川区東品川 2-1-1 市川市立図書館 6 階) 電話 03-3753-1111 受付時間 10:00～18:00 (土・日・祝祭日も受付可) 申込先: info@asianewwind.jp

【当日のスケジュール (予定)】
10:00 開会式
10:05 挨拶
10:10 特別講演 日本経済新聞社 記者 佐藤 孝一氏
10:15 アジ風の 20 年を振り返る (上野 孝一氏) (休憩)
10:20 パネルディスカッション 日本経済新聞社 記者 佐藤 孝一氏
10:25 閉会式 (終了後、オンライン参加者専用)
12:30 閉会式 (終了後、オンライン参加者専用)
12:40 昼食 (会場内、お弁当持参可)
13:40 懇談会 (会場内、お弁当持参可)

【お申し込み】
お申し込みの方は、アジアの新しい風事務局 (newwind@asianewwind.jp) へ直接ご参加希望のメールをお送りください。 ※6 月 23 日 (金) 締切

交流から生まれたタマサート大学出版の書籍 『なぞとき敬語』

日本では敬語が社会人の常識と言われています。これから日本で働く外国人が増えていく中で、日本人と円滑なコミュニケーションをとるためには、敬語が欠かせないものです。『なぞとき敬語』は、敬語表現を使用する日本人の考え方を垣間見ることができるように書かれたものです。この本は、東京外国語大学の坂本恵名誉教授と北京大学の趙華敏教授の共著『日语敬語



45 問』を基に、タマサート大学の教員がタイ人向けに翻訳編集したものです。「NPO 法人アジアの新しい風」の助成金できれいに仕上げることができました。心より感謝いたします。今年 6 月に e-book の形で <https://www.jsat.or.th/book-ebook/> にて公開されました。ぜひ一読いただき、ご感想を寄せていただければ幸いです。

(アジ風顧問 タサニー・メーターピスイト)

編集に携わってきた編集委員たちの想い

現編集長から始めましょう

アジ風新聞編集委員になって

7 年前に家内と共にアジアの新しい風の会員となり、何か事務局でお手伝いできることがあれば、と申し入れたのですが、思いもしないアジ風新聞の編集委員を仰せつかりました。文章を書くことは小学生の時から好きだったのですが、文章を校正するとか、紙面に合わせて編集するなど全く経験がなく、当時の編集長の古海正子さんと、「別冊 I メイト便り」の編集をなさっている原谷洋美さんに、編集用語を一から教わりながら始めました。

アジ風の理事に就任すると同時に、奥山寿子さんから編集長の大任を引き継ぐことになったのですが、和歌をたしなまれる原谷さんの日本語に対する独特の感性や、何事にも積極的に動かれる島村美智さん、新たに編集委員になられた志村真帆子さんの若者の感覚などに助けられながら、なんとか編集長の務めを果たしている、というのが実情です。

アジ風発足 20 周年とアジ風新聞 80 号ということでも歴代の編集長やアドバイザーの方々、編集委員の方々に創刊時のご苦労話や、紙面の改訂など、より読みやすい新聞を目指されたことなどを記していただきました。白黒モノトーンで縦書きの創刊号、カラー紙面になった 17 号 (P3 初代編集長の項参照)、カラーで横書き



＜風格のある創刊号。白黒の縦書き紙面は重厚です＞



＜リズミカルな横書き紙面になりました。9 年前です＞

紙面になった 46 号、ステップアップするアジ風新聞の歴史を紙上で紹介します。

(4 代目編集長 伊藤 莞爾)

ワクワクした編集会議

創刊号から40号までの10年間、新聞の編集に携わりました。



＜新鮮なカラー紙面。
この号以後、印刷はPCC大洋です＞

バックナンバーをひもとくと、いろいろな思い出が走馬灯のように駆け巡ります。16号までの4年間は、NPO設立セミナーで紹介された、福岡で個人営業の編集者へ、一度も会わないまま原稿を送りました。校了の紙面が届くと、渋谷のキンコーズへ走りしました。必要な枚数をゼロックスコピーしてすぐに、当時アルバイトのアジ風留学生が住んでいた江戸川事務所へ。A3の用紙を角封筒サイズに折込んで封入。パソコンの会員名簿から

宛名と住所をプリントアウトし、封筒に貼り、郵便局へすべりこんで、切手を貼って投函。4年間、留学生と二人で一日仕事でした。

17号からは現在のPCC大洋さんに、デザイン、印刷、郵送など一貫して受注していただき、それまで白黒だった紙面がカラーに変わって、見栄えがとても良くなりました。

そのころ編集会議では、会員の家に集まり、ああでもない、こうでもない、と素人編集員はひざを突き合わせ議論。終わった後のお茶の時間は、アジ風の活動を通して得た「気づき」を披露し合い、「これぞ草の根の異文化理解」と、自分の成長が実感できるワクワクの時間でした。半面、校正ミスは頻繁にあり、今でも見直すと恥ずかしいほどです。

今や80号まで続いたアジ風新聞は、校正ミスは少なくなり、とてもスマートになりました。何事も落ち着いてくると、黎明期に許された自由闊達さは減っていく傾向にありますが、アジ風新聞はいつまでも「学びの多い楽しい多文化共生紙」であり続けてほしいと願っています。

(初代編集長 上 高子)



アジ風新聞発刊当時の思い出

アジアの新しい風は2003年7月世田谷区弦巻にある団地の集会所で発足しました。後に初代理事長に就任された日本未来学会会長の林雄二郎先生からお祝いとお励ましの言葉をいただきました。

この年の秋に当時事務局があった江戸川区清新町の集会所で第1回の交流会が行われそのことをニュースとして事務局長だった上高子さんと一緒に作成しましたが、モノクロ印刷のタブロイド版で小売店の広告チラシの様な粗末なものでした。

しかし、その後正会員の森郁子さん、藤原玲子さんも参加してくれて上さんが企画と原稿の依頼を担当し私達はレイアウト、写真、原稿の割付け、ゲラの校正などを担当し、編集長の役目は

上さんと、あとの3人は編集委員でした。

原稿の依頼は日本と交流国のIメイト、各大学からの寄稿など多方面に涉り事務局長のご苦労は大変でした。この間毎号の発刊までの校正は上さんのお宅、正会員の森郁子さんのお宅、新宿、渋谷の喫茶店などで行いましたが、この作業が大変で、編集委員としては誤字やミスを無くすために一番神経を使いました。

(編集委員 新井 雅夫)



改めて園木さんを悼む

本紙アドバイザーを務めたことさえ忘れていたので、さしたる感慨も持たない。代わりに、会員20人をインタビューし、Iメイト・オブ・ザ・イヤーにもなった今は亡き我が「盟友」、園木宏志さんを改めて追悼することでお許し願いたい。

1980年代末、共に社は異なるが新聞社の福島支局勤務の時に出会い、なぜかウマが合ってよく飲みに行ったり、郊外の温泉に連れ立ったりした。その後も交友は続き、アジ風入会を勧めた際はその場でOKの返事を得た。

5歳の時、中国から引き揚げてきた彼は、定年後に中国語習得のために短期留学するなど根っからの親中家で、嫌中・嫌日に傾

きがちな両国民の関係の改善を心から願っていた。在日中国人による幼稚園児殺害事件についてのIメイトとの真摯な意見交換を紹介したアジ風新聞の記事には脱帽した。

筆者と同じく蔡琴（ツァイチン、女性歌手）の歌を愛した園木さん。癌で亡くなる半年前、「ここでもういいよ」と言い残して横浜駅からバス乗り場に向かった彼の笑顔がまだ脳にある。かれこれ6年がもう過ぎた。

(アドバイザー 小田 晋作)



アジ風新聞の編集に携わって

アジ風新聞の編集委員に入れて頂いたのは2013年の春号あたりからでした。メンバーは上高子さん、新井雅夫さん、森郁子さんそして新参者の私。森さんのお宅での和気あいあいとした編集会議が今も懐かしく思い出されます。その後編集担当に坂巻延子さんが加わって下さり、会場も調布市の貸し会議室で何度か、新井さん、坂巻さん、私の3名で編集会議を行いました。

編集長として一番苦労したことは、原稿依頼を即座に断られた時、その次は、締め切りになっても原稿が届かず、やっと頂いた原稿の文字数が予定の2倍も多かった時でした。多分いざ執筆を開始されると、思いが溢れて、ながい文章になったのではと思います。P4のIメイト便り以外は縦書きだった新聞は会員の皆様か

らのお声を反映して46号から横書きに変更しました。するとIメイト学生の名前の表示がスムーズになり、無事に変更出来てホッとしました。

新聞を担当し、アジ風全体の活動や会員の皆様とのコミュニケーションが増え、私自身、学びながら楽しませて頂きました。48号からは新井さんに替り原谷洋美さんが、55号からは坂巻さんと交代の伊藤莞爾さんとの3人で編集作業を行いました。そして2017年秋に奥山さんに編集長をバトンタッチしました。

(2代目編集長 古海 正子)



アジ風新聞会員紹介インタビュー

2016年3月にアジ風新聞第49号の会員紹介欄をお引き受けしてからもう7年以上の歳月が経ちました。

2007年にアジ風入会以来いろいろなプログラムに参加させていただきましたが、いつもは大勢の中なので、誰かと二人でゆっくりお話をする機会は殆どなかったように思います。しかし、インタビュアーをさせていただいてからは、選りすぐりの会員の方々と毎回差し向かいで1～2時間ゆっくりと楽しい時間を持つことが出来るようになりました。

初めの頃インタビュー記事はNHKのプロジェクトXの語り口を真似ていたのですが、やっぱりこれは可笑しいと気付く、今はもっと丁寧に書くようにしています。これまで失礼の段この場をお借りしてお詫び申し上げます。

お酒の飲める方とは居酒屋で杯を傾けながら、飲めない方とは喫茶店でコーヒーを飲みながらのインタビューでしたが、コロナ以降は対面を避けZoomミーティングにしました。最初は戸惑いもありましたが、慣れてくるとお互いに時間的にも経済的にも負担が少ないし、なかなかいいものだと思っています。

(インタビュアー 園田 成和)



得たものがはるかにまさった経験

前任者を交えての初の編集会議に参加後、右も左も分からないままに入稿を待ち、編集作業に突入。今は懐かしい思い出です。その後、先輩編集委員の方々と印刷会社の方のお力添えを頂き、編集委員として数年を過ごしました。その間、何度、関係の方々にご迷惑を掛け、冷や汗をかいたことでしょう。

入稿された一点一点の原稿に触れ、筆者におもいを馳せることはとても楽しいことでした。また、文字の後ろにある事象や、日本語、文章編集等の多岐にわたって学ぶ機会を得ました。

それでも、難しかったことをあげるとするならば、入稿原稿の文字数が依頼のそれをはるかに越えていた場合です。全文掲載を第一に考えましたが、紙面の割り付け上、やむを得ず文字数削減を余儀なくされることもありました。最終的に校了となった段階でも「本当にこれで良かったのだろうか」と悩んだことが多々ありました。

現編集委員の方々が感じる喜びや悩みは千差万別かと思います。一方、読み手は、等しく、皆さまへの感謝を忘れることがないことを願います。

(編集委員 坂巻 延子)



アジ風新聞とわたし

わたしが関わったのは61号から70号まで、新聞の編集など全くの素人のわたしですが、素人であるからこそ「読者の目線」で新聞作りに関われるのでは、と、不遜なことを思いながら編集のお仲間に入れていただきました。

アジ風新聞はすでにかたちが決まっています、マンネリ化を防ぐためにも何かおもしろい企画をと思っていた矢先に、あの2020年の新型コロナの流行です。留学生も来日できず、活動が途絶えてしまい、イベントで紙面を埋めることができなくなってしまいました。

わたしはちょうどIメイト交流担当を上理事から引き継ぎ、コロナ禍での活動を模索していましたが、そのころ企業や学校で使い始めていたZoomを使って、オンラインでIメイト勉強会を開き、手応えを感じました。その後、各大学との交流会をオンラインでやるのが定着し、新聞にもその様子を掲載。日本中、いや世界中を不安に陥れた新型コロナ禍の中でもアジ風の活動が続けられていることを、会員の皆さんに知っていただけたとおもいます。

実際、記事をまとめてくださったのは原谷さんと伊藤さんのお二人でしたので、わたしは好きなことを言わせてもらっていました。編集会議も和気藹々と楽しかったことを懐かしく思い出します。

(3代目編集長 奥山 寿子)



アイのあふれる最終ページへどうぞ

万葉集は「～この岡に 葉摘ます児 家告(の)らせ 名告らさね～」の、雄略天皇が若菜を摘む乙女に名前を聞く、おらかな和歌で始まります。Iメイト交流はまさにこの歌の通りだ、とマッチングの度にソワソワしながら名前を名告り、あなたは？と最初のメールを送ります。

年4回季刊の新聞はその間の折々の行事やトピックスを掲載しますが最終ページは毎号「Iメイト便り、Iメイトって？Internet、愛、(出)会いのアイ」の見出しの元に、4大学5グループから2組の交流模様を紹介し、溢れるばかりの交流文が届く場合は、1組750字に納まるように泣く泣く短くさせて貰います。時代を映すSNSでの短文交流も増え、絵文字やスタンプなどカラフルな紙面も多くなりました。

交流メンバーは新しくなりゆけど「あなたの名前は？」「私は○○です」から築かれてゆく絆は脈々と波打ち流れ続けています。これこそがアジ風の底流であり、新聞作りの醍醐味であろう、と編集委員9年目も文字と人に心を寄せてゆきます。

印刷を依頼していますPCC大洋の岡吉明様には、無茶な厚かましい注文にも丁寧に対応して頂き、どの号も見映えのする新聞に仕上がりますことを報告し、感謝申し上げます。

(編集委員 原谷 洋美)



緊張の日々

71号の新年号から編集に参加したが、まだ3年にも満たない未熟者だ。ページ割、配置、はみだした原稿を如何にきれいに収めていくか、何もわからず、ひたすら先輩方についていくだけの編集委員だった。

伊藤編集長、原谷編集委員という大ベテランに、文字通り、手取り足取り教えて頂いた。冷や汗をかく失敗も多々あった。

けれども、毎回頂く原稿から、会員の交流、キャリア、思いが



ひしひしと伝わってきて、お会いしていない方でも本当に親しく感じることができるようになったのは、何よりの収穫だった。

とはいえ、まだまだ、修行中の身、心を引き締めて進んでいきたい。

今回原稿をお願いした編集に携わられた方々は、締め切りの前に原稿を下さり、字数も見事に収めてくださった。さすがだと思い、心から感謝したい。

(編集委員 島村 美智)



佳境に入るおしゃべりの場

楽しい一時間半

5月14日のおしゃべりの場は私にとって本当に特別で、大変楽しかったです。初めて司会を務めましたので、ちょっと緊張しましたが、Iメイトの皆さんが誰でも熱心にご参加いただき、嬉しかったです。今回のオンラインおしゃべりの場で、パートナーの林さんだけではなく、日本人の会員の皆さんと話し合えました。誰でも親切で楽しんで話し合っただけでなく、家族みたいだと感じます。「特別な料理」というテーマだけではなく、就職の経験や自分の夢といったいろんなことについて話しました。オンラインミーティングを通じて、多くの有益なことの勉強になり、自分の日本語でのコミュニケーションが以前よりもだんだんよくなってきたと思います。1時間半だけのおしゃべりの場ですが、皆さんいつもお世話になっていて、本当に感謝します。次のおしゃべりの場を楽しみにしています。

(ハノイ貿易大学3年 ダオ・ティ・ミン・グエット

Iメイトは林孝男さん)



おしゃべりの場はいつも心がほのぼのと感じられる

アジ風の活動に参加し始めた時、コロナのせいでいろんな活動が行えませんでした。その時「おしゃべりの場」ができました。もし、おしゃべりの場がなければ、自分のIメイトとしか交流できないでしょう。おしゃべりの場に参加すると日本人の方だけではなく、先輩と後輩とも交流することができるようになりました。

日本人の皆様は知らない日本の文化を教えてください、学生が分からないところをゆっくり説明してくれたり、とても優しいと思いました。おしゃべりの場の参加者はいつも変わるので、最初にしりとりゲームや写真を見て答えるゲームや数字語呂合わせゲームなどいろんなゲームも楽しくて日本の文化についての勉強になりました。

最近、日本語専攻の学生だけではなく、他の学部の学生も参加して参加者が増えてもっと楽しくなり、素敵な人たちと交流できてとても嬉しいです。

(タマサート大学3年 シャノンヤー・キラー

Iメイトは原谷洋美さん)



台風一過の山登り

景信山登山

高尾駅より数分、中央道が遥か頭上に見えるバス停から清流沿いを歩き、いよいよ山道へ。登り始めは、遅れないかと不安でしたが、連なって歩くのは快適で、木漏れ日も心地よく、ベテランメンバーのリードで安心して歩けました。日本・中国・ベトナム語まじりで年齢もバラバラの私たちグループは、「こんにちは」と行き交う人々には不思議だったかもしれません。ランチを食べた景信山頂からは、遥か眼下の町々が小さく見えました。「次は向こうの頂へ」と言い怯みましたが、小仏峠を挟んだアップダウンは意外なほどアツという間で、しかも頭上にあった中央道(小仏トンネル)の上を歩き越えたとはい、驚きました。城山で天狗様と記念撮影の後は林間をどんどん下り、そろそろ膝が限界と思い始めたところで終点となりました。

本当にあっという間の楽しい「山歩きの会」お連れ頂きまして誠にありがとうございました。

(正会員 菊池 和美)



初めての登山

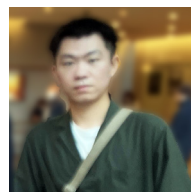
6月4日に、アジ風の皆さんと一緒に景信山に登った。正直に言って、私は登山の経験は一回もなかったが、人生貴重な体験になれると信じているので、参加を決めた。

その日、高尾駅でアジ風の皆さんと集合して、バスに乗って、小仏バス停へ行った。小仏バス停を皮切りに、山登りが始まった。何と言っても、これは私の初めての登山経験だったが、すぐに疲れた。だけど、皆さんからの配慮のおかげで、私も徐々に元気を回復した。登り道は歩きやすいので、12時ぐらいに景信山頂上に到着した。短時間の休憩で、食事をしたり、雑談をしたりした後、小仏城山頂上を目標にして出発した。頂上に着いた時、天候も曇ってきたが、頂上から見た遠い町と曇り空は梅に驚であった。もちろん、心身とも爽快になった。

リズムの速い生活を送る現代人にとって、山登りのような自然と接する機会が少ない。今回、アジ風の皆さんとの景信山登山には大変満足していた。未来に、他の山も登りたい。

(清華大学大学院 修士1年 孫秋実(スン チョウ スー)

Iメイトは松浦康彦さん)



会員紹介

須賀 智之さん

須賀智之さんは1965年に大阪府で生まれました。大阪市内のミッションスクールで6年間学んだ後、京都大学法学部に入学しました。サークル活動はESSでしたが、その縁でアジ風に入ることになったのです。というのは、ある時ESSのOB会で13年先輩の武田高さんに会いました。武田さんはアジ風の理事で西日本地区事務局長でした。「アジアの人々と共に、アジアの文化を世界に発信していく風になる多文化共生の草の根運動」の話を聞いて迷わず入会を決意し、今では武田さんの右腕になりました。もう一つの偶然が重なっていました。実は、筆者が東京で開かれた京大ESSOB会で武田さんと知り合い、アジ風に勧誘した経緯があったのです。

須賀さんは大学卒業後電力会社に入社され、若い時に会社から米国ロースクール留学を命ぜられ、フィラデルフィアのペンシルバニア大学で2年間学ばれ、ウイコンシン州のサマースクール

で中西部の生活も経験し、アメリカの大きさと多面性を肌で感じたという事です。

国際室に在籍した時はベトナム、ミャンマー、インドネシアなど海外の電力会社の研修員の受け入れを担当され、国際交流に従事されました。

須賀さんの海外との繋がりルーツは大学時代にります。お父様は大学でドイツ文学を教えておられましたが、学生時代からペンフレンドとして30年以上もお付き合いして来たドイツ女性がお子様を連れて日本に來られ1か月ほどホームステイされました。それが国際交流に目覚めた原点だったのです。

アジ風ではこれまでにベトナム人3人、インドネシア人1人とIメイト交流をされました。今はまだ現役サラリーマンなので、アジ風の活動に充分時間が取れないが、もう何年か経てばもっと踏み込み、交流校訪問などにも積極的に参加したいと胸を膨らまされました。

(インタビュー： 園田 成和)





日本では、5月から新型コロナ感染症の分類が変更され、街を歩いていると、海外からの訪日客も増えたように感じます。コロナ禍で加速したオンライン交流は、私たちの物理的な距離を縮めてくれましたが、これからは、直接交流できる機会も少しずつ増えると嬉しいですね。今回は、昨年秋から開始された荒木春洋さんと馬紫吟さん、小山昌久さんと劉瑞程さんの交流をご紹介します。

(コーディネーター 三木 京子)

荒木春洋さんと馬紫吟さんの交流

荒木さん→馬さん

2023年3月19日



先日は北京の春の写真をありがとう。水鳥は鴨じゃなく、おしどりですね。おしどりのカップルはとても仲がよいので、日本では仲のよい夫婦のことを「おしどり夫婦」と言いますよ。

馬さん→荒木さん

3月21日

花と動物と植物の名前は全然知らないです。実家に帰る時に、両親がいつも今の子供たちは麦の苗も知らないと言います。

荒木さん→馬さん

3月22日

花には「花言葉」もあり、また日本の俳句では、花や動物、植物などを詠んだ「季語」が沢山ありますよ。

荒木さん→馬さん

4月14日

猛勉強のストレスの中でも失わない、しなやかな馬さんの感受性を感じています。素晴らしいです。馬さんが毎日元気で過ごせますように。時々、思い切り伸びをしましょう！

馬さん→荒木さん

4月17日



私たちの両親は子供が何よりも大切に、子供の成功は自分の成功だと思う中国の普通の両親です。子供は両親の晩年の責任を取って、両親の恩恵を返します。日本の親子もそうですか？

荒木さん→馬さん

4月21日

両親の老後の面倒を見る、お世話をする、育ててもらった恩返しをするなどの気持ちや責任感、中国人の方が日本人より強いように感じます。韓国でもそう。韓国ドラマを見ると、お嫁に行っても、毎日のように実家に電話をかけています。韓国語の先生に聞くと、「今の若い夫婦ではそんなことはありませんよ、昔の話です」ということでしたが、中国ではいかがですか？

馬さん→荒木さん

4月24日

北京は今暖かくなりました。夜になると、寮の近くの運動場で学生たちが3、4人のグループで座って、ギターを弾きながら歌います。去年、2か月間くらいギターを習いましたが、今全然できないです。

荒木さん→馬さん

4月28日

先週は三毛の「サハラ物語」を紹介してくれてありがとう。三毛という作家はこれまで全く知らなかったもので、教えてもらって良かったです。早速 Amazon で購入しました。

小山昌久さんと劉瑞程さんの交流

小山さん→劉さん

2023年2月3日

新年の祝日、ふるさとに戻り、ご家族と楽しく過ごされたことと思います。



今日、2月3日は日本の「節分」です。季節が冬から春に代わる節目（ふしめ）でもあり、日本の神社やお寺、各家庭でも「豆まき」という行事を行います。大豆を「鬼は外、福は内」というかけ声をかけてまきます。「悪

を追い払い、福を招く（招福）」という意味を持つ伝統行事です。貴国にも同じような風習(Tradition)があるかもしれません。

劉さん→小山さん

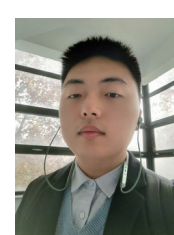
2月17日

私は、正月に故郷の小さな田舎に帰ってきました。確かに、新学期はもうすぐ始まります。私は明日汽車で北京に行きます。

私が春節の前に撮影した花火の写真を送ります。中国人は花火が健康をもたらし、病気から遠ざかると考えています。

劉さん→小山さん

4月24日



7月初めに、主に沖縄と東京の2つの地域で調査研究を行います。一つの日本会社を選んで、企業経営状況と経済情勢を調査します。小山様は、今どの日本企業の経営状況が面白くて、調査に値すると思いますか？

残念ながら清華大学には桜はありません。来年の今頃、私は日本に花見に行けるかもしれません。

小山さん→劉さん

4月24日

日本企業のフィールド調査、実践的で面白そうですね。沖縄は農業と観光、東京は金融・情報サービス、一流企業の本社立地機能に特徴があります。

調査対象企業の選択ですが、劉君はどのような産業、企業に関心がありますか？興味のある産業、企業を選ぶことが重要です。なぜなら関心が高いほど、深い情報収集、分析が可能となるからです。中国企業との競争力比較も面白いかもしれませんね。来春、日本でお花見ができると良いですね。

今後の行事予定

*詳細はHPを参照

7月14日(金) 清華大学からの訪問団来日
アジ風会員との交流会

JICA 地球広場にて 13:30 ~ 16:30

8月5日(土) 架け橋グループ帰国前懇親会
(リアル)

8月6日(日) 清華大学とハノイ貿易大学の
合同交流会(オンライン)

9月上旬 タマサート大学とパジャジャ
ラン大学の合同交流会(オンライン)

9月10日(日) アジ風総会

・・・編集後記・・・

I メイトと交流を重ねるにしたがって、ことばのやりとりも増え、話す内容も多岐にわたり楽しさも増しますが、それでもなお、時には話が噛み合わず、伝わらない場面に出くわすことがあります。そんなとき、別の表現を探したり、ことばを尽くして説明したりすることで、やっと通じ合う瞬間というのは何度経験しても嬉しく感じるものです。しかしながら、色々試みても何だか釈然としないというときも当然あり、その都度、「ことばを伝える」ことの難しさを痛感しています。

アジ風創立20周年に伴い、アジ風新聞も80号という節目を迎えました。今号では、アジ風の活動をこれまで伝えることに尽力されてきた歴代編集長、編集委員のことばが詰まったものになっています。今後も、アジ風新聞がI メイトや会員の日々の活躍に注目し共に喜び、皆さまに伝える新聞であるよう精進して参ります。

(編集委員 志村 真帆子)

